

P-Fスタディにおける不明確語の研究

—特に、成人用「なんで」反応の意味と解釈について—

藤 田 主 一

I. はじめに

Rosenzweig が創始したP-Fスタディ (Picture-Frustration Study) は、心理学的なパーソナリティ・テストの中の投影法 (projective method) に属しており、ロールシャッハ・テスト (Rorschach Test) やTAT (Thematic Apperception Test) と並んでその代表的なテストの一つであり (藤田^{1, 2)}), 今日までさまざまな研究が発表されている (秦³⁻⁵⁾)。P-Fスタディは、日常生活場面においてごく普通に経験される24種類の軽い欲求不満場面から構成され、対象者の主観的な反応から、その人の力動的なパーソナリティ像を描けるように工夫されている。また、2つの刺激材料、つまり漫画風の絵画刺激と左側人物の言語刺激が外的にセットされているため、場面ごとの状況決定因が強く、反応の自由度が低くなることも事実である (藤田⁶⁾)。

P-Fスタディは、今日、広く臨床的な領域で使用され、同時にパーソナリティ理解の用具としての有効性を高めているが、臨床的にみた場合、対象者の力動的な人格像と多少の違いに出会うことがある。例えば、各場面の反応ではどちらかという素直な傾向を示していても、現実像はそうでないことも見受けられる。そこで、P-Fスタディの内容をより深く追究するということから、大きく2つの研究方法が検討されている (藤田・高橋⁷⁾)。1つには、P-Fスタディの標準法を吟味していく立場であり、2つには標準法以外の施行方法を工夫する立場である。

ところで、標準法の1場面1反応においても、対象者はいろいろなことを考えていると思われる。絵画刺激と言語刺激を見ながら、それを“そのまま回答する”“考えたからといって回答するとは限らない”“回答してみたいけれども敢えてしない”こともあろう。さらに、“こういうことを考えていない?”と聞かれて“そうだ”と気がつく場合もある。つまり、実験者側のヒントによって対象者の反応水準を引き出すこともできる。こういった可能性と並行して、標準法の1場面1反応をスコアリングする際に、その方法に困難を覚える状況によく遭遇する。P-Fスタディを実施する上で、反応語を語義的にスコアリングし解釈することが、最も重要なのはいうま

でもない。しかし、解説書（林ほか⁸⁾）に全面的に頼り、解説書を基礎にして実施あるいは研究する者にとっては、スコアリングの是非は致命的となる。

このような判定の難しい反応を、仮に「不明確語」と定義すると、不明確語には、①反応自体が不明確な場合、②動作や態度を主体に表現する場合に、大別できると思われる。こうした不明確な反応を、経験的な観点（主観的に判断する場合、回答した人をよく知っているので推測判断する場合など）から判定する試みもあるが、検査する側の合意に基づくことが多い。

成田⁹⁾は、児童用を実施した時に頻出する不明確な反応語（語義的なスコアリング判定が難しい反応語）に対して資料を提出している。その中で、「動作、例えば（泣く）（おこる）（お母さんにいってやる）」といったように、なぜそうするのか意味のとりにくい反応を、我々は動作反応と名づけて資料を整理してみた……（中略）……実際には、テスターは「どうしてなの」と聞くことにより判定の資料を得ることになるのではなからうか……（中略）……多くの場合で動作表現があらわれる被験者のケースについては、別の視点から充分検討する必要があるのではなからうか。このことは、（わからない）（とりちがえ）の場合も同じで、このような反応が多く出る時には、そのケースの検討は別の視点から改めてすべきであろう」と述べている。

藤田⁷⁾も、この問題については以前から関心があり、特に児童用を多数の子ども達に実施していると、種々の不明確語を前に立ち往生してしまうことがある。単に“うん”“はい”“いいえ”“いいよ”などのみが記述されている場合には、いろいろな可能性が考えられてしまうのである。それは、許容なのか？、無視なのか？、否定や拒否なのか？である。例えば、児童用場面23「おつゆが冷めてしまって、悪かったね」に対して“いいよ”という反応は、言外の感情や語調を考慮しないと難しい。従って、スコアリングする時には< I', i, M', M, m > のどれとも受け取ることができる。これらの不明確な反応語に対して、解説書⁸⁾では U (unscorable) という記号を与えるか、再度の質問を試みることを許容しているが、集団で実施された検査のみで終了した場合には、再質問は不可能に近い。

藤田¹⁰⁾は、P-Fスタディの不明確な反応の中で、『なんで』反応を取り上げて検討した。児童用を材料にして、『なんで』という反応語が想定されるかを小学生を対象に調査した。まず、肯定と否定の観点から出現の可能性を集計すると、場面1, 9, 6, 21, 12, 18の6場面が順に高い比率で有意に肯定された。反対に、場面13, 14, 15, 19, 20, 24, 11, 23, 22, 3の10場面はこの順に『なんで』と応答する可能性が有意に否定された。そこで、肯定された場面の意味を求め、それを標準法に準拠してスコアリングを試みた。結果は以下の通りである。

- ①場面1……E=45.8%, E'=25.6%, e=22.1%, 他責的=93.0%
- ②場面9……e=45.8%, E=34.7%, E=19.5%, 他責的=100%
- ③場面6……E=47.1%, e=35.3%, E=10.3%, 他責的=92.7%
- ④場面21……e=54.4%, E=44.1%, M=1.5%, 他責的=98.5%

⑤場面12……E=45.1%, E=37.1%, e=8.1%, I'=8.1%, 他責的=90.3%

⑥場面18……E=46.7%, e=21.0%, I'=12.9%, M=9.7%, 他責的=69.3%,
無責的=16.2%

例えば、場面18「お誕生日に呼んであげないわよ」に『なんで』と反応した場合の意味は何だろうか。“なんで…呼んでくれないの”“なんで…いやだなァ”“なんで…呼んでよ!”“なんで…意地悪だなァ”“なんで…ひどい奴ダ”などが考えられるが、語義的にスコアリングするには材料が少なく難しい。その子どもを熟知して<E(ラージE)>と判定できればよいが、上記の結果を見るとそうでない場合も存在するので、今後、検討の余地が残されている。

これに対して、秦⁵⁾は「藤田はP-Fスタディ児童用で『なんで?』という反応の出現しやすい場面と反応の意味について研究している。その結果によると、この反応は場面によって異なるが、Eやeと判定されることが多いと報告されている。しかし、この場面と類似したフラストレーション場面のスコアを手引きで参照してみると、場面6『どうして遊んでくれないの?』や場面12『なぜそんなことをいうの?』が、いずれも当惑(I')と相手に対する要求(e)の組み合わせとして『I'//e』とスコアされている。したがって、場面18の場合も『I'//e』とするのが妥当ではないかと考えられる。もちろんこの場合も質問によって言語反応の意味を明確化できれば迷わずにすむことである」と述べ、スコアリングの際に実施者側が誤りをしないように提言するとともに、再質問を行うことで疑問点を解消するべきであると主張している。しかし、『なんで(?がつかないことが多い)』という反応語のみが記述してある場合に、それがすべて回答者側の「当惑+要求」と限らない事実は、上記の藤田¹⁰⁾の結果が示している。スコアリングの誤りに対する秦⁵⁾の指摘はもっともであり、P-Fスタディが語義的解釈に基づいて構成されているのは論を待たないが、言外に攻撃的な意味を含め語調を強めて『なんで!』の可能性も否定できないし、回答者(小学生)が示したE反応の多さに意味があるのではないだろうか。

児童用は近年中に改訂されるが、秦(私信による)によれば、標準化の手続きに際して各場面に現れた「不明確語」は、P-Fスタディの原点にもどり、すべてスコアリング不能(Uと記号化)とするらしい。そうなれば、U記号の量的・質的な意味が求められることになる。いずれにしても、このテーマは今後ともP-Fスタディ実施上の本質とかわるため、さらに研究が進められるものと思われる。

II. 研究の目的

本研究では、P-Fスタディに現れた「不明確語」の中から『なんで』反応を取り上げ、特に以下の点を明らかにすることを目的とする。

①成人用において『なんで』反応がどの程度、出現する可能性があるかを検討する。

- ②『なんで』反応の標準法におけるスコアリング上の資料を提出する。
- ③『なんで』反応の心理的な意味は何かを検討する。

Ⅲ. 方 法

1. 被験者

本研究に参加した被験者は、東京都内の大学に通学する大学生 163 名（男子85名，女子78名）である。調査実施時の平均年齢は，男子20.1歳，女子19.7歳である。

2. 調査材料

P-Fスタディ成人用の24場面それぞれについて，右側人物の吹き出し部分にあらかじめ『なんで』と印字した用紙を作成した（図1の例題を参照）。

3. 手続き

調査は教室単位で実施された。調査用紙が配付された後，以下の教示が与えられた。

「下の例題を見てください。『この帳簿のつけ方は何ですか！』と，左側の人が言っているところです。その時，右側の人は『なんで』とだけ答えました。本当は，いろいろなことを言いたかったのですが，『なんで』とだけ言い返したのです。しかし，『なんで』ということばだけでは，よく分かりません。

2枚目から，日常生活に見られる24の会話場面があります。次の2つの質問に答えてください。

(1)これらの場面で『なんで』と言い返すことがありますか？

言い返すことが「ある」または「ない」のどちらかに○印をつけてください。

(2)『なんで』と言い返すことがあった場合（「ある」に○印をつけた場合），右側の人が『な

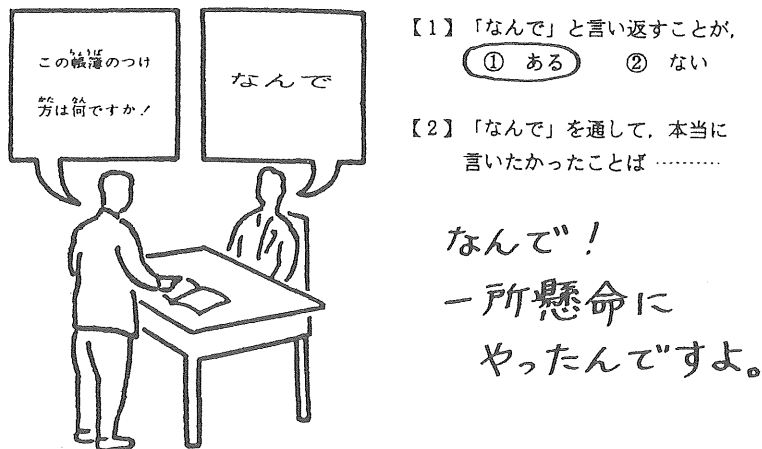


図1 P-Fスタディ成人用における『なんで』反応の例題

んで』ということばを通して、本当に言いたかったことは何でしょうか。ほかに言いたかったことがあったのでしょうか。『なんで』を通して言たかったことばを、回答欄に書き入れてください。」

調査用紙を回収後、質問に対する誤回答・誤判断・無記入などが混入した用紙を除いた枚数を、実際の被験者数（163名）とした。

IV. 結果と考察

1. 回答結果の集計基準について

手続き(1)の集計方法は、「ある」または「ない」のどちらかに○印をつけた頻度を基に男女別の比率を求めた。

手続き(2)の集計方法は、(1)において「ある」に○印がついているもののみを対象とした。記述された反応語は、P-Fスタディの標準法(表1⁸⁾)を参照)に準拠してスコアリングが行われた。すなわち、記述された各場面に対する反応語を、①アグレッションの方向 (Directions of Aggression)、②アグレッションの型 (Types of Aggression) という2次元のカテゴリーに分類する。さらに、アグレッションの方向は他責的 (Extragggression, E-A)、自責的 (Intragggression, I-A)、無責的 (Imagggression, M-A) の3方向に、アグレッションの型は障害優位 (Obstacle-Dominance, O-D)、自我防衛 (Ego-Defence, E-D)、要求固執 (Need-Persistence, N-P) の3型に分類される。これらの相互の組合せにより基本的には9種類の評点因子 (Scoring factors: スコアリング) の成立が可能であり、24場面を通しての評点因子の出現頻度ならびにその特徴や反応転移などの推移から、その人のパーソナリティを浮き彫りにすることで、主観的な反応を科学的な標準へと導くことになるが^{5・8)}、ここでは反応比率を中心に集計することにした。

2. 24場面における『なんで』反応の可能性について

図2は、P-Fスタディ24場面に対して『なんで』と言い返す可能性があるかの回答結果を、「肯定」と「否定」の観点から分類した比率をグラフ化してまとめたものである。グラフ化に際しては、①「肯定」率の高い場面から並べる、②男子の「肯定」率を基準にして女子の「肯定」率をプロットする、という方法にした。図からも理解されるように、『なんで』と答える可能性の「肯定」率に幾分かの男女差が認められるが、以下に特徴的な諸点を列記しよう。

(1) 男子において、「肯定」率の高い(50%以上の率)場面は、

場面10「君は嘘つきだ。君にはそれがわかっているはずだ(超自我阻害場面)」(97.6%)が最も高率で、以下、場面7(90.2%)、場面13(86.4%)、場面8(80.5%)、場面9(80.5%)、場面20(79.5%)、場面16(72.7%)、場面14(68.2%)、場面23(68.2%)、場面3(65.9%)、

場面12 (65.9%)、場面21 (65.9%)、場面 5 (58.5%)、場面24 (54.5%)、場面 2 (53.7%)、場面17 (52.3%) までの合計16場面である。

(2) 男子において、「否定」率の高い (50%以上の率) 場面は、

場面18「すみません。一つだけ残っていたのも、たった今売り切ってしまった (自我阻害場面) (79.5%) が最も高率で、以下、場面22 (75.0%)、場面15 (68.2%)、場面11 (61.0%)、場面 4 (58.5%)、場面 1 (58.5%)、場面19 (54.5%)、場面 6 (53.7%) までの合計 8

表 1 評点因子一覧表⁸⁾

アグレッションの型 アグレッションの方向	障害優位型 (O-D) (Obstacle-Dominance)	自我防衛型 (E-D) (Ego-Defense)(Etho-Defense)	要求固執型 (N-P) (Need-Persistence)
他 責 的 (Extr aggression)	E' (他責逡巡反応) (Extrapeditive) 欲求不満を起こさせた障害の指摘の強調にとどめる反応。 「チェ!」「なんだつまらない!」といった欲求不満をきたしたことの失望や表明もこの反応語に含まれる。	E (他罰反応) (Extrapunitive) とがめ、敵意などが環境の中の人や物に直接向けられる反応。 E: これはE反応の変型であって、負わされた責めに対して、自分には責任がないと否認する反応。	e (他責固執反応) (Extrapersistive) 欲求不満の解決をはかるために他の人が何らかの行動をしてくれることを強く期待する反応。
自 責 的 (Intr aggression)	I' (自責逡巡反応) (Intropeditive) 欲求不満を起こさせた障害の指摘は内にとどめる反応。 多くの場合失望を外にあらわさず不満を抑えて表明しない。 内にこもる形をとる。外からみると欲求不満の存在の否定と思われるような反応である。従って失望や不満を抱いていることを外にあらわさないためにかえって障害の存在が自分にとっては有益なものであるといった形の反応語もこれであるし、他の人に欲求不満をひき起させそのためにたいへん驚き当惑を示すような反応もこれに入る。	I (自罰反応) (Intropunitive) とがめや非難が自分自身に向けられ、自責・自己非難の形をとる反応。 I: これはI反応の変型であって、一応自分の罰は認めるが、避け得なかった環境に言及して本質的には失敗を認めない反応。多くの場合言い訳の形をとる。	i (自責固執反応) (Intropersistive) 欲求不満の解決をはかるために自分自ら努力をしたり、あるいは、罪償感から賠償とか罪滅ぼしを申出たりする反応。
無 責 的 (Imaggression)	M' (無責逡巡反応) (Impeditive) 欲求不満をひき起こさせた障害の指摘は最小限度にとどめられ、時には障害の存在を否定するような反応。	M (無罰反応) (Impunitive) 欲求不満をひき起したことに對する非難を全く回避し、ある時にはその場面は不可避的なものと見なして欲求不満を起させた人物を許す反応。	m (無責固執反応) (Impersistive) 時の経過とか、普通に予期される事態や環境が欲求不満の解決をもたらさざらうといった期待が表現される反応。忍耐するとか、規則習慣に従うとかの形をとることが特徴的である。

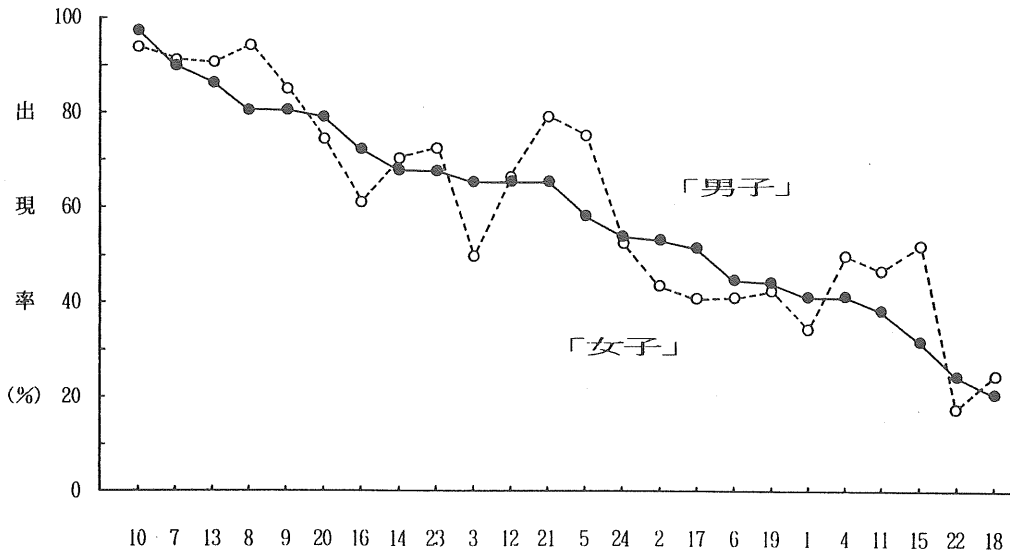


図2 不明確語『なんで』に対する出現率の可能性

(場面)

場面である。

(3) 女子において、「肯定」率の高い(50%以上の率)場面は、

場面10「君は嘘つきだ。君にはそれがわかっているはずだ(超自我阻害場面)」(94.1%)と場面8「君の女友達が明日遠足の仲間に僕を招待してくれたよ。彼女は君が行く事にはなっていないとっていたがねー(自我阻害場面)」(94.1%)が最も高率で、以下、場面7(91.2%)、場面13(90.9%)、場面9(85.3%)、場面21(79.5%)、場面5(76.5%)、場面20(75.0%)、場面23(72.7%)、場面14(70.5%)、場面12(67.6%)、場面16(61.4%)、場面15(52.3%)、場面24(52.3%)、場面3(50.0%)、場面4(50.0%)までの合計16場面である。ただし、場面3と場面4は「否定」率と差はない。

(4) 女子において、「否定」率の高い(50%以上の率)場面は、

場面22「お怪我はありませんでしたか?(自我阻害場面)」(81.8%)が最も高率で、以下、場面18(75.0%)、場面1(64.7%)、場面17(59.1%)、場面6(58.8%)、場面19(56.8%)、場面2(55.9%)、場面11(52.9%)までの8場面である。ただし、場面3と場面4は「否定」率が50.0%で「肯定」率と同率であるため(3)に含めて記述している。

このように「肯定」率と「否定」率を男女別に集計した場合、その出現率に差異が認められる場面もある(図2を参照)が、『なんで』反応の観点からみると、特に90%以上の高率でその可能性を「肯定」した場面を取り上げておくことにしたい。

<男子> 場面10「君は嘘つきだ。君にはそれがわかっているはずだ」(超自我阻害場面)

場面7「でもね。それはちょっと言い過ぎじゃありませんか?」(超自我阻害場面)

<女子> 場面10「君は嘘つきだ。君にはそれがわかっているはずだ」(超自我阻害場面)

場面 8 「君の女友達が明日遠足の仲間に僕を招待してくれたよ。彼女は君が行く事にはなっていないと聞いていたがねー」(自我阻害場面)

場面 7 「でもね。それはちょっと言い過ぎじゃありませんか？」(超自我阻害場面)

場面13 「昨日約束をしましたが、今朝はお逢いしているひまがないんです」(自我阻害場面)

3. 24場面における『なんで』反応のスコアリング(評点因子)の方向について

次に、P-Fスタディ24場面において『なんで』反応に「肯定」を示した被験者の記述を、標準法に基づいてスコアリングを試みた。表2は男子、表3は女子の結果である。ここでは24場面全体を問題にしているので、「肯定」率の高低にかかわらずスコアリングしているため、男子と女子の基準となる母集団(出現率)が異なることはいうまでもない。そこで、男女ごとに「肯定」率の高い(90%以上)場面を取り上げて、スコアリングに基づく解釈を試みることにする。

表 2 P-Fスタディ成人用における『なんで』反応の解釈(男子)

(%)

場面	E'	E	<u>E</u>	e	I'	I	<u>I</u>	i	M'	M	m	E-A	I-A	M-A	O-D	E-D	N-P
1	2.9	88.3	0	2.9	0	0	0	0	0	5.9	0	94.1	0	5.9	2.9	94.2	2.9
2	0	81.9	4.5	0	4.5	0	6.8	2.3	0	0	0	86.4	13.6	0	4.5	93.2	2.3
3	18.5	37.1	0	0	22.2	0	0	3.7	18.5	0	0	55.6	25.9	18.5	59.2	37.1	3.7
4	23.5	29.4	0	5.9	0	0	0	0	0	41.2	0	58.8	0	41.2	23.5	70.6	5.9
5	0	31.2	14.6	4.2	41.6	0	0	6.3	0	2.1	0	50.0	47.9	2.1	41.6	47.9	10.5
6	7.9	65.9	0	18.4	0	2.6	0	0	0	2.6	2.6	92.2	2.6	5.2	7.9	71.1	21.0
7	0	28.4	68.9	0	0	2.7	0	0	0	0	0	97.3	2.7	0	0	100.0	0
8	40.9	45.4	0	6.1	0	0	0	0	7.6	0	0	93.4	0	0	7.6	0	0
9	0	47.0	0	50.0	0	0	0	0	0	3.0	0	97.0	0	0	0	50.0	50.0
10	0	72.5	17.5	0	7.5	0	2.5	0	0	0	0	90.0	10.0	0	7.5	92.5	0
11	0	100.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100.0	0	0	0	100.0	0
12	14.8	81.5	0	0	0	0	0	0	0	0	3.7	96.3	0	3.7	14.8	81.5	3.7
13	44.7	55.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100.0	0	0	44.7	55.3	0
14	83.4	10.0	0	0	0	0	0	0	0	3.3	3.3	93.4	0	6.6	83.4	13.3	3.3
15	0	21.4	0	0	0	0	0	0	0	75.0	3.6	21.4	0	78.6	0	96.4	3.6
16	0	71.9	25.0	0	0	0	3.1	0	0	0	0	96.9	3.1	0	0	100.0	0
17	0	30.4	8.7	17.4	32.6	2.2	8.7	0	0	0	0	56.5	43.5	0	32.6	50.0	17.4
18	16.7	33.3	0	11.1	0	22.2	0	5.6	0	11.1	0	61.1	27.8	11.1	16.7	66.6	16.7
19	0	65.0	5.0	0	5.0	0	25.0	0	0	0	0	70.0	30.0	0	5.0	95.0	0
20	48.6	15.7	0	0	0	5.7	0	0	15.7	14.3	0	64.3	5.7	30.0	64.3	35.7	0
21	0	58.6	0	0	41.4	0	0	0	0	0	0	58.6	41.4	0	41.4	58.6	0
22	27.3	0	0	9.1	45.4	0	0	0	18.2	0	0	36.4	45.4	18.2	90.9	0	9.1
23	30.0	56.7	0	0	3.3	0	0	0	5.0	0	5.0	86.7	3.3	10.0	38.3	56.7	5.0
24	0	50.0	0	12.5	0	0	0	0	0	37.5	0	62.5	0	37.5	0	87.5	12.5

(1)男子の場面10 (97.6%の「肯定」率) では、その72.5%の反応がE因子 (他罰反応) であり、17.5%がE因子である。反応語の例は以下の通りである。

①左側人物「君は嘘つきだ。君にはそれがわかっているはずだ」(超自我阻害場面)

②右側人物の『なんで』反応の解釈

E因子 (72.5%) …… 「どうして、お前にそれがわかる」

「なんで、そんなことが言えるのか」

「俺が、いつどんな嘘をついた！」

「なんで、俺が嘘つきなんだ」 ……など。

E因子 (17.5%) …… 「嘘ついていない」

「僕が嘘つきなはずがないじゃないか」 ……など。

③E + E (他罰反応) で、90.0%を占めている。

(2)男子の場面7 (90.2%の「肯定」率) では、その68.9%がE因子で、28.4%がE因子である。

表 3 P-F スタディ成人用における『なんで』反応の解釈 (女子) (%)

場面	E'	E	<u>E</u>	e	I'	I	<u>I</u>	i	M'	M	m	E-A	I-A	M-A	O-D	E-D	N-P
1	16.7	58.3	0	8.3	0	0	0	0	0	16.7	0	83.3	0	16.7	16.7	75.0	8.3
2	0	86.6	0	0	6.7	0	6.7	0	0	0	0	86.6	13.4	0	6.7	93.3	0
3	47.0	35.3	0	0	5.9	5.9	0	0	5.9	0	0	82.3	11.8	5.9	58.8	41.2	0
4	17.6	29.5	0	0	0	0	0	0	5.9	47.0	0	47.1	0	52.9	23.5	76.5	0
5	0	19.2	11.5	3.9	63.5	0	0	1.9	0	0	0	34.6	65.4	0	63.5	30.7	5.8
6	53.5	28.6	0	10.7	0	0	0	0	0	3.6	3.6	92.8	0	7.2	53.5	32.2	14.3
7	0	21.0	75.8	0	0	0	0	0	0	3.2	0	96.8	0	3.2	0	100.0	0
8	76.5	17.2	0	0	0	0	0	0	0	6.3	0	93.7	0	6.3	76.5	23.5	0
9	3.4	63.8	0	29.4	0	3.4	0	0	0	0	0	96.6	3.4	0	3.4	67.2	29.4
10	0	59.4	9.4	0	25.0	3.1	0	0	0	3.1	0	68.8	28.1	3.1	25.0	75.0	0
11	6.3	93.7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100.0	0	0	6.3	93.7	0
12	21.7	78.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100.0	0	0	21.7	78.3	0
13	60.0	40.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100.0	0	0	60.0	40.0	0
14	98.4	1.6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100.0	0	0	98.4	1.6	0
15	0	4.3	0	0	0	0	0	0	0	95.7	0	4.3	0	95.7	0	100.0	0
16	0	51.9	44.4	0	0	0	3.7	0	0	0	0	96.3	3.7	0	0	100.0	0
17	0	38.9	0	27.8	33.3	0	0	0	0	0	0	66.7	33.3	0	33.3	38.9	27.8
18	54.5	36.4	0	0	0	0	0	0	0	0	9.1	90.9	0	9.1	54.5	36.4	9.1
19	0	68.4	10.5	0	0	5.3	15.8	0	0	0	0	78.9	21.1	0	0	100.0	0
20	45.5	24.2	0	0	0	0	0	0	18.2	12.1	0	69.7	0	30.3	63.7	36.3	0
21	1.4	30.0	5.7	0	60.0	2.9	0	0	0	0	0	37.1	62.9	0	61.4	38.6	0
22	37.5	50.0	0	0	0	12.5	0	0	0	0	0	87.5	12.5	0	37.5	62.5	0
23	23.4	42.2	0	0	0	0	0	0	3.1	0	31.3	65.6	0	34.4	26.5	42.2	31.3
24	13.0	43.5	0	13.0	0	0	0	0	0	30.5	0	69.5	0	30.5	13.0	74.0	13.0

反応語の例は以下の通りである。

①左側人物「でもね。それはちょっと言い過ぎじゃありませんか？」（超自我阻害場面）

②右側人物の『なんで』反応の解釈

E因子 (68.9%) ……「そうは思わない」

「本当のことだからいいじゃないか」

「思ったことを素直に言ったまでだ」……など。

E因子 (28.4%) ……「なんで、君は今の自分の立場を考えないのか」

「俺は客だ」

「ふざけるな！」……など。

③E + E（他罰反応）で、97.3%を占めている。

(3)女子の場面10 (94.1%の「肯定」率) では、その59.4%がE因子で、25.0%がI' 因子である。

反応語の例は以下の通りである。

①左側人物「君は嘘つきだ。君にはそれがわかっているはずだ」（超自我阻害場面）

②右側人物の『なんで』反応の解釈

E因子 (59.4%) ……「自分で確かめてから言え！」

「君は僕を嘘つき呼ばわりするんだい」

「証明しろ」……など。

I' 因子 (25.0%) ……「なんで、そんなふうに思うの？」

「なんで、そんなふうに言うの？」……など。

③E + E（他罰反応）で68.8%を占めるが、自責的で28.1%の反応がある。

(4)女子の場面8 (94.1%の「肯定」率) では、その76.5%がE' 因子で、17.2%がE因子である。

反応語の例は以下の通りである。

①左側人物「君の女友達が明日遠足の仲間に僕を招待してくれたよ。彼女は君が行く事に
はなっていないといていたがねー」（自我阻害場面）

②右側人物の『なんで』反応の解釈

E' 因子 (76.5%) ……「そんなの嘘だよ」

「なんで、そんなこと聞くんだい」

「なんで、君が招待されるのかなあ」……など。

E因子 (17.2%) ……「なんで、ひどいじゃないか」……など。

③E' + E（他責的）で、93.7%を占めている。

(5)女子の場面7 (91.2%の「肯定」率) では、その75.8%がE因子で、21.0%がE因子である。

反応語の例は以下の通りである。

①左側人物「でもね。それはちょっと言い過ぎじゃありませんか？」（超自我阻害場面）

②右側人物の『なんで』反応の解釈

E因子 (75.8%) ……「言い過ぎたとは思わない」

「なんで、言いたいことを言っただけだ」

「なんで、まずいものはまずいんだ」

E因子 (21.0%) ……「なんで、客に対してそういうことが言えるんだ」

「きちんと言わなければならないこともあるんだ」

……など。

③E + E (他罰反応) で、96.8%を占めている。

(6)女子の場面13 (90.9%の「肯定」率) では、その60.0%がE' 因子で、40.0%がE因子である。反応語の例は以下の通りである。

①左側人物「昨日約束をしましたが、今朝はお逢いしているひまがないんです」(自我阻害場面)

②右側人物の『なんで』反応の解釈

E' 因子 (60.0%) ……「なんで、せっかく来たのに」

「何か急用でもできたのかな」……など。

E因子 (40.0%) ……「じゃ、約束しないでくれ」

「なんでですか。約束だったでしょう」……など。

③E' + E (他責的) で、すべての反応の100%を占めている。

(7)男子の場面11は「肯定」率は低い (39.0%) が、その100%がE因子で占められている。反応語の例は以下の通りである。

①左側人物「すみません。交換手が電話番号をまちがえたものですから——」(自我阻害場面)

②右側人物の『なんで』反応の解釈

E因子 (100%) ……「なんで、きちんと調べないんだ」

「なんで、交換手のせいにするんだ」

「なんで、間違えるんだ」……など。

③他罰反応で、100%を占めている。

このように、スコアリング (評点因子の確定) に困る不明確語の中で取り上げた『なんで』反応に対する出現率は、男女によって差異はみられるものの、その多くはアグレッションの方向が他責的 (E', E, E, e) であるのが特徴的である。

V. 要 約

本研究では、P-Fスタディに比較的に現れやすい不明確語の中から『なんで』という反応語を取り上げ、出現の可能性と評点上の解釈についての資料を提出した。得られた結果の主なものは以下の通りである。

- (1) P-Fスタディ成人用において、『なんで』反応に「肯定」の可能性が確認された。
- (2) P-Fスタディ成人用において、男子に『なんで』反応に対する「肯定」率が高かったのは(80%以上)、場面10を筆頭に、場面7, 場面13, 場面8, 場面9などであった。
- (3) P-Fスタディ成人用において、男子に最も『なんで』反応に対する「否定」率が高かったのは場面18であった。
- (4) P-Fスタディ成人用において、女子に『なんで』反応に対する「肯定」率が高かったのは(80%以上)、場面10と場面8を筆頭に、場面7, 場面13, 場面9などであった。
- (5) P-Fスタディ成人用において、女子に最も『なんで』反応に対する「否定」率が高かったのは場面22であった。
- (6) P-Fスタディ成人用において、『なんで』反応に対するスコアリング(評点因子)を試みると、男女とも、E', E, E, eという他責的なアグレッションの方向が多いのが特徴的であった。

<引用文献>

- 1) 藤田主一:「心理学教科書とP-Fスタディ」, 1990, 城西大学女子短期大学部紀要, 7, 1, 129-140.
- 2) 藤田主一:「心理学教科書に扱われたP-Fスタディの現状と課題—特に, 教育心理学教科書を中心に—」, 1991, 城西大学女子短期大学部紀要, 8, 1, 161-182.
- 3) 秦 一士:「日本におけるP-F Studyの研究—文献目録—」, 1987, 甲南女子大学人間科学年報, 12, 73-92.
- 4) 秦 一士:「日本におけるP-F Studyの研究II—文献目録—」, 1996, 甲南女子大学人間科学年報, 21, 23-31.
- 5) 秦 一士:「P-Fスタディの理論と実際」, 北大路書房, 1993.
- 6) 藤田主一:「P-Fスタディ母—子場面における刺激構造の検討」, 1995, 城西大学女子短期大学部紀要, 12, 1, 119-128.
- 7) 藤田主一・高橋秀和:「P-Fスタディの基礎的過程に関する研究」, 1984, 日本教育心理学会第26回総会発表論文集, 454-455.
- 8) 住田勝美・林 勝造・一谷 彊ほか:「P-Fスタディ解説—1987年版—」, 三京房, 1987.
- 9) 成田錠一:「乳幼児期における社会性の発達と指導」, 学苑社, 1980.
- 10) 藤田主一:「P-Fスタディに現われた不明確語の研究—特に『なんで』反応の意味と解釈について—」, 1987, 日本心理学会第51回大会発表論文集, 575.